

みのおのおいたち その23

豊川地区(五)

一四年間で、実に六回も「請雨」を勝尾寺に願っています。このことが、同寺の「寺僧日記」などの古文書に書かれているので、次に示してみましよう。

永享五年天日照り、所々ニ雨乞アリ、同年七月七日外

に雨が降った」という内容です。この日記には、

同年五月二十四日午時、粟生ノ菩提寺ノ惣社、同夕坊ニ炎焼ス。

とも見えます。照り続いた天候も原因したのでしょうか。今も

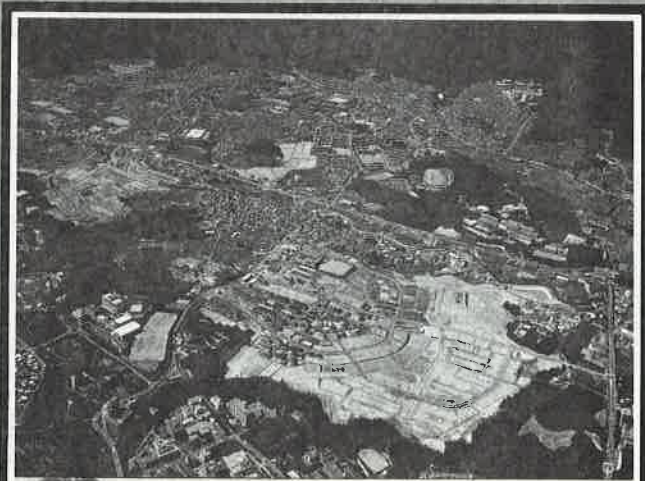
ナシ、七月二日外院庄ヨリ当寺へ請雨、五日酉刻九ツ時ヨリ十日午時マテ降りヌ、片時モ不止、近代百年來ノ大雨ト谷々言フ、四日マタ外院ヨリ祝酒持上ル。

と、あります。次いで、文安四

鎌倉時代の粟生村、つまり豊川地区は摂津国切つての製炭地

でしたが、生産の基盤はやはり農業です。ところが、集落の多くは山麓台地や丘陵の上に所在していたので、水利には恵まれない土地柄でした。中でも、外院、新家、小野原の地域は丘陵であつたので河川がなく、そのため各所のため池などをつくって雨水を集め、農業用水に使用していました。従つて、少々の日照りでも水不足になりがちで、しばしば干ばつに見舞われました。こうした災害を防ぐため外院などの村々では、勝尾寺に「降雨」を祈願していました。

例えば、室町時代の永享五年(一四三三)から文安四年に至



(上)豊川地区航空写真 (下)小野原地区にある楠水龍王(水神)のほくら

院庄ヨリ付了、八日ヨリ初メ、八日九日降りヌ。

「永享五年は晴天続きで、各地に雨乞いがあつた。七月七日に外院庄から雨乞いがあり、八日に祈つたところ、八日と九日

山中にある素戔鳴尊神社と、菩提寺の二坊が焼けたことがわかります。また「請雨勅行目録」には、

永享八年天下早魃シテ、所々ニ請雨スト雖モ、更々、驗

年の記事には、

七月外院庄請雨、酒持上礼、当國中請雨ナシ、当寺ノ雨ト近里本尊ヲ信仰ス、珠更外院・萱野雨強ク降ル、郷本・小野原ハ少シ降ル。

と記されています。このように外院庄では、日照り続きで干ばつときは、勝尾寺の本尊に降雨を祈願し、毎回効果があつたようである。そのお礼に酒を納めていました。こうした雨乞いは外院に限らず、近隣の村々でも行われていたことでしょう。そのときの「礼酒」の多少が雨量に影響でもしたのでしょうか。「本郷・小野原ハ少シ降ル」とは、興味がひかれます。

雨乞いを神仏に祈願するのは全国的に行われていたことで、今も各地に遺存している「水神」の社や祠は、その地の人々が豊作を願つて雨乞いをした名残りとしての遺跡でもあります。

自然現象は神々のしわざや意思によるとした考えかたは別に、その心情の根底にあるのは自然を克服することではなく、むしろ自然と人間との関係をいづも「調和」しようとしていたことに歴史的な意味が感じられます。